
東方三柱神

霧夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方三柱神

【Zコード】

Z9964Z

【作者名】

霧夜

【あらすじ】

ある日、某ゲームをやっていた三人組の前に閻魔様が現れて・。
・。東方の世界に転生した三人だつたが、そこで一匹のボロボロになつた狐を助けたら何と、その狐は、転生した時代では珍しい妖狐だつた！

この小説は、東方の二次創作小説です。独自解釈や、二次創作要素が大量に含まれます。苦手な方や、「目が腐っちゃう。」という方は、ブラウザバックをおすすめいたします。基本駄文です(^w^)

第一話 三柱、大地に立つ！（前書き）

W
W
W
どーも。霧夜です。また新しい小説書いちまた。大丈夫かな？

第一話 三柱、大地に立つ！

ある日、ある部屋で三人の少年が遊んでいた。やつてこるのは、
P プラグームである「地球防 軍2」である。

「くそ！また、僕が先にですか？これで、最初に殺されるの三回

「たまーん！」

「てか、戦車砲直撃とか・・・ウケル〜〜！」

三人は、対戦モードで遊んでいた。しかし、そこにある一人の人

物が現れた。

卷之三

「おま、ちょー！ライサン　－Ｚで狙撃は反則だろ！体力設定30

「ちよつとで勝てるわけねーじゃん!？」

「やつ」 w w w -

「ちよおせ、ジエノサイド ヤノンは反則すぎるだろ！」
「…」

「使っちゃいけないなんて言われてないＺＥ　ＷＷＷ」

「確かに言ひてなし気がする」

፳፻፲፭

「・・・・。そなたら話を聞かんか～～～～～～～～～～～～～～」

「で、閻魔様が何の変哲もないただのクサレグーマーの俺たちに何のご用でしょうか？」

「お前・・・。それ自分で言つてどうする？」

「てか、微妙におれつちいらも巻き込むな！」

「お前、その変なのがないの？」

「だめ、ひしゃべー。」

「そなたら、人の話を聞かんか／＼！」

「「「すいませんでした～！！」」

その時の三人は、見事な○△の形で頭を下げていたといつ。

・・・閻魔様御説明中・・・

「・・・。つまり、手違いで俺たちに神氣が宿ってしまったと？」

「まあ、そういうことになるな。」

「で、僕たちはどうなるのですか？」

「そうそう、おれたちもそれが聞きたかったんだ。」

「まあ、そなたらに相応しい世界に転生という形になるであらうな？」

「俺たちに相応しい世界・・・。・・あるじやん！」

「「「へ？」」

「東方の世界！」

「ぶつ、確かにいいかもしないけど・・・。」

「大丈夫なのか？」

「まあ、それを望むのであればそつそく準備してしょせよ。」

「「「あざーす！」」

「微妙に腹立つのづ・・・。」

・・・数刻後・・・

見事に三人は草原にぽつんと立っていた。

「なあ・・・。」

「なんだ？」

「どうした？」

「俺達さあ・・・東方の過去の世界に転生させてつて頼んだっけ

？

「・・・いや・・・。」

「たぶん頼んでない・・・。」

「・・・。」

しばらく沈黙が三人の間に漂つた。

「まあ、神気を持つてゐることは俺たちは神になつてゐる?ってことなんだ!生き抜いてやるつぜー!」

「「そうだな!」

「じゃあ、お決まりのあれ言つぞ!ー!ー!ー!

「「おおー!」

「「新世界の神になるー!」

三人とも・・・もう神だよ・・・。by作者

第一話 二柱、大地に立つー（後書き）

今回は、じこまでです。誤字脱字などありましたら、お気軽にコメントで指導してください。

第一話 狐がボロボロだ、あなたならどうする？助ける？それとも見捨てる？

サブタイトルが長すぎる…。オーナー一話連続投稿でいいぞー！
妖狐ですが…。藍さんではありません。まだ、いないはずです
のでへへ；

第一話 狐がボロボロだ、あなたならどうする？助ける？それとも見捨てる？

あれから数刻後三人は森の中を歩いていた。とりあえず、歩いてみようという事で歩いているのだが・・・。見つけたのは大きめの洞穴一つである。

「俺達なんも見つけられないな・・・。」

「いや、そういうもだろ。都會では、考えられないことだけぞ。」

そう、この三人は東京住まいであつたために何もないという状況が普通では考えられなかつた。

「・・・！？おい、あの草陰のとこ・・・。」

「「ん？」

「なんか倒れとる・・・。」

そう、草陰のところに何かが倒れているのである。

「どれどれ？・・・てつ、狐じやん・・・。」

「狐だな・・・。」

「それにしても、ボロボロやな。」

「とりあえず、どうする？」

「よし、ここは、落ち着いて保健所に連絡しようか・・・。」

「いやねーから。」

そう、三人がいるのは縄文よりもはるか昔である。そんなところに、保健所や電話などがあるはずもなかつた。

「じゃあ、どうする？」

「・・・ほつといて死なれるのもやだし、さつきの洞穴につれて帰ろうぜ。」

「・・・わかつた。」「

・・・数刻後・・・

私は、今見覚えのない場所にいる。先日尻尾が三尾になつてうろついていたら、蜘蛛のよつやつに襲われてここまで、ダメージを負つてしましました。とりあえず、ここは、そこなのでしょう? 見たところ洞穴のようですが・・・。ここが、あの蜘蛛もどきの巣という可能性50%、誰かに助けられた可能性0%、死の世界という可能性20%、夢の可能性30%・・・これが能力で計算した結果です。私、食べられてしまうのでしょうか?

狐 side out

「いやー。大量だな。」

「この木の実食えるのか?」

「まあ、俺たちは死なないだろうし、動物も生命力が高いというから大丈夫だろう・・・たぶん。」

「おい、今たぶんって言つたろ!」

そんな事を言いながら狐はすでに起き、怯えていた。

「お! 目が覚めたか? ・・・大丈夫だ。安心しろ俺たちは、敵じゃない。」

すると、狐が震えながら

「ほ、本当?」

まるで、か弱い少女のような声でしゃべったのである。

「「「狐がしゃべつた! ?」」

三人は、マジでびっくりしていた。

「助けていただきありがとうございました。」

「いやいや、それよりも人化はできない?」

「人化・・・ですか?」

「そうそう、なんか落ち着かなくてさ・・・。」

「・・・やつてみます。」

すると、狐が光を発し光が收まるとそこには白い着物を着て獣の耳と、三尾の尻尾を携えた少女・・・ではなく幼女が座っていた。

「 「 「ええ／＼＼＼＼！－！」」

「え、えつと・・・どうされました？」

驚いている三人に妖狐は完全に引き気味になつていた。

「えつと、まあ、俺は山田陸やまだりくだ、能力は『銃火器を創造する程度の能力』を持つてる。よろしくな！」

「僕は、上杉天斗うえすぎあまと、能力は『湿氣を司る程度の能力』だよ。よろしく。」

「おらつちは、上条優麻かみじょうゆうまだ。能力は『炎を操る程度の能力』だ！ よろしく！」

「え、えつと白尾楓はくびかえでといいます。能力は『式を操り、司る程度の能力』です。こちらこそ、よろしくお願ひします。」

「それで、君はこれからどうする？」

「あなた方に助けていただいたのも何かのご縁でしょう。共にいさせてください！」

「「「ん、まあいいよ。」」

「ありがとうございます！・・・ところで・・・あなた方のその力は？」

「ん？ああ、神力のこと？僕たちは、神だよ。」

「ええ／＼＼＼＼！」

こうして、三柱に白尾楓が仲間に加わったのであった。

第一話 狐がボロボロだ、あなたならどうする？助ける？それとも見捨てる？

今回、少し無理やりすぎたかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9964z/>

東方三柱神

2011年12月30日23時45分発行